読者の声

学閥人事の救いがたい弊害

(一)

三学期になると学校は、年中の忙しさが倍加する。それだけでなく教師にとってはいやな季節でもある。異動の話があると当人にとっては勿論、周囲の人にとっても何となく落ちつかなくなる。

立身出世も望まず、ひたすら子供のことを考えて情熱を注いでいれば、敢えてそれらに気をとられる必要もなかろうが、本県の底流にある学閥支配の人事の構造には、腹だたしく思ったこと以上に、教育という崇高な社会的使命からして甚だ逆行していることに、良心の呵責に堪えないものがあった。

現職を去って数年、今その頃のことを思い出すのも酷なことであるが、その中から二・三今もって忘れられないことを記してみたい。

(二)

話は少し古く、二十年も前になると思う。A学校のB校長の所属するグループで、ある夏の日曜日、近くの町の料亭で研修会があった。そのあとの懇親会、ここまでは特に問題はなかったのだが、彼は飲酒のままバイクに乗り帰宅の途中交通事故を起してしまった。

県教委はまことにゆるやかな処分で済ませたようである。しかもその男は、その翌年、至れりつくせりの勤奨退職となったため良識ある人々を亜然とさせた。その背景には所属する学閥の多大な工作があったと聞いている。

ちなみにそのBなる校長は、学閥内部からも同僚や部下からもその人間性の疑われるような人間で、自分勝手、子供無視、教育的見識など全くなく、よくも教員になれた上校長になったというくらい不思議な人物で、勿論地域の人からも疎んぜられていた。

(三)

僻地に勤務する教員は家庭とはなれ単身赴任し、苦労しながら僻地教育のために全力をあげている。それらの人に敬意を表したい。

ところである僻地の学校に、Cという校長がいた。彼は三学期になると人事異動などで郡の中心校での会議をいいことにして、月に一・二度くらいしか学校に帰らず自宅にとじ

こもっている。しかも多額の旅費までもらってである。それなのに教頭が連絡のため自宅へ電話しても用が足らないことが少なくない。村の教育長が度々学校へ電話しても連絡がつかず、ほとほと困りはてていた。

教育は人なりなど言われて久しい。ところでこのCなる校長は、教育や子供、部下職員を考える前に自分の都合や利益が先にたつ。村の人たちが、どうしてこんな人間を校長にしたかをいぶかしがっていた。

県内には立派な校長も少なくないが、このようなひと握りの非人間性のものが堂々と校長としてまかり通っていることは、学閥人事の救いがたい弊害でなかろうか。聞けば彼は、所属する学閥には極めて上手に立廻っているようである。

㈣

県にはいくつかの学閥集団がある。その教頭と校長のポストはほぼ固定されているばかりでなく、その数が増減することはめったにない。要するに、教頭になればそのほとんどが校長になれるというグループもあれば、教頭になっても半数くらいしか校長になれないグループもある。これは一般県民にとっては極めて判りにくいことである。学校の人事が、表向きは県教委によって行われているが、その裏面で特に幹部人事について学閥が介入しているということは、県民の多くが知っていることで、教育や教員に対する不信をかっている。これは、県教育界にとってまことに不名誉なことであるばかりでなく、教育という公器を冒瀆するものである。

小中学校の教員には尊敬される人も少なくない。日本や地域の現状を憂い、子供の姿に心を痛め何とか打開しようと日夜努力している人も多い。特に女教師や若い教師に多い。それに対して、中年以上の男教師が急速にそのことから遠ざかっていく姿をよく見かける。これは多分に学閥による人事支配と軌を一にしているように思える。

㈤

教育に立身出世主義は無縁であるばかりでなく、反教育的であると共に反社会的であり、歴史の進歩に対する反動にくみするものが多い。

今まで多くの教師に接し、その能力のすばらしさ人柄のよさにほれこむことも少なくなかった。尊敬する人の資質は多方面であるが、現代の社会においては権力に仰合せず、反動にくみせず、ひたすら歴史の進展の方向に誠実に努力する姿そのものであると考える。学閥問題における教師論の一面を考えてむすびとしたい。

（K・I）